

## 中間構文における総称性

小 山 久美子

### Genericity in Middle Constructions

Kumiko KOYAMA

This article analyses genericity in middle constructions. It is said that middle constructions share certain similarities with generic sentences. Both constructions, for example, are stative rather than eventive. Through this discussion middle constructions are compared with generic sentences syntactically, semantically and pragmatically. It is shown that it is almost impossible to get generic interpretation in the middle construction unless its subject is generic.

#### 1. 序

中間構文の研究は盛んで、さまざまなアプローチがなされてきており、動詞の派生や時制 (cf. Keyser and Roeper(1984), Fagan(1988)), 表層主語, 潜在的動作主(implicit agent), 副詞的修飾要素などについて論議されている。中間構文(1)は、これとよく比較される能格動詞構文(ergative sentences)(2)とは異なる点がいくつかある。たとえば、前者は潜在的動作主の存在が認められており、副詞が必要とされているが、後者にはそのような制約はない。

- (1) a. The floor waxes easily.  
b. A person who isn't self-conscious photographs well.  
c. Nasturtiums do not transplant well.
- (2) a. The ship sank.  
b. The ball bounced.

一方、中間構文は総称文(generic sentences)(3)と同じであるともいわれている。Keyser and Roeper(1984)は、「中間構文は真実であると思われる命題を述べているので総称文と呼ばれることがある」と記しており、Condoravdi(1989)も中間構文は総称文であることには疑問の余地がないと述べている。

- (3) a. Oil floats on water.  
b. A beaver builds dams.  
c. Insects have six legs.

そこで、本稿では、総称性を表す典型的な構文であり、中間構文と同じであるといわれている総称文と比較することによって、中間構文における総称性を検討していくことにする。まず、中間構文の特性について再考察し、次に総称文の特性について簡単に触れる。最後に、中間構文と総称文を統語論的、意味論的、および語用論的観点から考察していく。

## 2. 中間構文の特性

ここでは、英語における中間構文にみられる特性について一つずつ再検討していくことにする。

### 2.1 動作主の存在

まず、中間構文の特性の一つとして、動作主が表層に現れないということが挙げられる。中間構文に生起しうる動詞の本来的派生<sup>1</sup>は別にして、(4b)のように他動詞が中間構文の動詞としてその位置を占めているが、同じく他動詞が用いられる受動態(5b)と比較すると、後者は動作主の具現を許すのに対し、(4c)が示すように前者はそれを許さない。

- (4) a. John read this book yesterday.  
b. This book reads easily.  
c. \*This book reads easily by most readers.
- (5) a. John broke that window yesterday.  
b. That window was broken by John yesterday.

中間構文は動作主を具現できないが、そうかといって動作主の存在を全く否定してしまうとやはり容認されなくなる。前述したように、中間構文とよく比較される構文に能格動詞構文(ergative sentences)(6a)がある。この能格動詞構文も、形の上では中間構文と同様で動作主が具現されていない。もっというなら、能格動詞構文の方は、動作主の存在そのものには関知しないのである。言い換えれば、中間構文の場合は、たとえ動作主が表層に具現されていなくてもその存在を前提としているのに対し、能格動詞構文が動作主を伴わないのは、「自ずから、ひとりでに、誰の力も借りずに」といった自発性を本来的に意味するためである<sup>2</sup>。逆に、中間構文が「自ずから、ひとりでに、誰の力も借りずに」ということを意味するような副詞を伴

うと容認不可能になる。

- (6) a. The door opened.  
 b. The door opened { all by itself.  
                               without the intervention of anybody.
- (7) a. This book reads easily.  
 b. \*This book reads easily { all by itself.  
                                       without the intervention of anybody.

ところが, Stroik(1992)は, 照応形や for 句の形で動作主を表層に具現することができるとして, 次の例を挙げている<sup>3</sup>。

- (8) a. Books about oneself never read poorly.  
 b. No Latin text translates easily for Bill.

福田(1993)で述べたように, 確かに, 動作主として認識できないわけではないが, 主語の名詞句内に生じているものはあくまでも主語の一部にすぎず, これを動作主として具現したとはいえない。また, はっきり動作主を具現することができる受動態に for 句を用いることはできないことを考慮すると, for 句は by 句と比べると動作主としての意味が希薄であるといえる。たとえ for 句によって動作主を表したとしても動作主指向の副詞とは共起できない。

- (9) \*That book reads carefully for Mary.

動作主指向の副詞と共起しないということは, 中間構文が動作主指向の構文ではないということを示しているといえる。したがって, 中間構文では動作主を表層に置くことはできないが, あくまでもその存在が含意されているということはいえる。

## 2.2 中間構文に生じる動詞

ところで, どんな動詞でも中間構文に生じるかというところではない。知覚, 感情, 理解, 疑念などを表す動詞は容認されない。

- (10) \*Crickets { see } on summer evenings.  
                   { watch }  
                   { hear }
- (11) \*His mathematical papers { explain } easily.  
                                       { understand }  
                                       { learn }  
                                       { doubt }

Fagan(1992)は、他にも reach, hit, kick などは中間構文に現れないと述べている。

(12) a. John reached the finish line in a few minutes.

b. \*The finish line reaches easily.

(13) a. John hit the wall.

b. \*This wall hits easily.

(14) a. John kicked the dog.

b. \*The dog kicks easily.

さて、しばしば論議的になる動詞に sell と buy がある。

(15) a. This book sells well.

b. \*This book buys well.

これらの容認性の可否は、問題となっている動詞を遂行する者、つまり、動作主の意図が反映されているか否かによる。「買う」という行為は、動作主の意図が大きく関係してくる。買うか、買わないかは動作主の意図次第である。これに対し、「売る」という行為は動作主の意図というよりはむしろ表層主語にかかっている。つまり、売れるか売れないかは潜在的な動作主の力ではなく表層主語である本の持つ魅力次第ということである<sup>4</sup>。

さらに、同じ動詞でも主語によって容認性が異なることがある。

(16) a. Chickens kill easily.

b. \*Mary kills easily.

(16 b)が容認されないのは、主語が人間であるということと関係があると思われる。能動態の文において人間が主語の位置にある場合、その人間は行為者と解釈されるのが普通である。そのうえ、中間構文の主語が行為・動作の対象になるものであるということを考えあわせると、中間構文では人間以外の生物や物が主語の位置に生じることが多いということがいえる<sup>5</sup>。しかし、(16 b)の容認性には、それだけではなく他の要因も考えられる。つまり、人間、しかも特定の人を殺しやすいということがわれわれのもっている一般的知識と相反することであるからと思われる。つまり、統語論的、意味論的要因以外の要因も関係しているということがいえる。

### 2.3 副詞的要素

副詞的要素についてみてみよう。前述の通り、能格動詞構文と異なり、中間構文には副詞的修飾要素が必要であるといわれている。この構文に共起する最も一般的な副詞は、easily, well などの容易さを表す副詞 (facility adverbs) である。

- (17) German cars handle easily.
- (18) The cotton garments iron well.
- (19) Our 4-wheel drive handles smoothly.

様態を表す句なども中間構文に生じる。

- (20) a. This book sells like hotcakes.
- b. This dog food cuts and chews like meat.
- (21) These shirts wash in cold water only.

Fellbaum(1985)は、特定の動作主の意図を表すような様態の副詞は容認不可能になると指摘している。

- (22) \*Red wine spots wash out carefully.
- (23) \*cotton irons cautiously.
- (24) \*The novels sell proudly.

このことは、前述したとおり中間構文が動作主指向ではないということを表している。

さらに、中間構文が動作主指向ではないことを示す例として次の(25)が挙げられる。

- (25) a. The clothes wash with no trouble because they are machine washable.
- b. \*The clothes wash with no trouble because I have lots of time.

(25 b)が容認不可能なのは、従属節が動作主指向であり表層主語となんら関係のないためである。容認可能な文では、従属節があくまでも表層主語に関係する、つまり、表層主語の特性と結びついているからである。したがって、中間構文では容易さを表す副詞的修飾語を伴っていても、それに続く要素が表層主語の特性を述べるものでなければ共起しないということがいえる。

## 2.4 意味特性と情報構造

中間構文とは、主語についての特性を述べる文である。したがって、この構文はできごとを表しているのではなく状態を表しているといえる。個々の動詞ができごとを表すものであっても、構文全体としての意味は主語の特性を表す状态的(stative)なものであって、できごとの(eventive)なものではない。

また、中間構文では副詞がないと容認不可能になることが多い。このことは情報構造と関係があると思われる。Halliday(1985)は、話し手が伝えたいと思っていること、すなわち情報構造上の焦点は最後に置くというのが、英語における一般的な特徴であると述べている<sup>6</sup>。情報としての価値の高いもの、つまり重要なものはなるべく後方へもっていく傾向にあるという。

文末ほど新情報を担い情報量が多くなるというわけである。ということは、中間構文では文末の副詞が最も多くの情報量を担っているということになる。したがって、文末に副詞のないものは容認不可能になってしまうのである。

(26) a. This book reads easily.

b. \*This book reads.

(27) a. This radio sells like hotcakes.

b. \*This radio sells.

また、焦点となるべき語が文末にないと次の例のように容認されない。

(28) a. This door opens easily.

b. \*This door easily opens.

ドアが開くということはドアのもっている基本的な機能である。ごく普通の状況下でこのことをわざわざ伝えるという必要性はあまりないと思われる。しかし、ドアの開き方がスムーズかどうかということは伝えるべき情報として意味をもってくる。したがって、開け易さについて述べている文末の副詞は構文上必要なものである。別の言い方をすれば、ここに焦点があるといえる。

ところで、中間構文に必要であるといわれている副詞的修飾要素を伴わない例がある。

(29) a. Glass recycles.

b. This dress buttons.

c. This dress won't fasten.

d. This meat doesn't cut.

このような文が容認されるのはどうしてであろうか。先に述べるところがあったように、情報構造という観点からみると、情報量は後ろへいくほど多くなる。つまり、新情報になるわけである。(29 a), (29 b)の場合は、ともに文末にある動詞自体が主語の特性を述べており、修飾要素を伴わなくても情報価値がある。また、(29 c), (29 d)の場合は、否定文であるということが情報量を増している要因になっているといえるのである。否定の助動詞があることによって、肯定よりも付加価値が高くなるわけである。当然のことながら、これらが主語の特性を述べているということはいうまでもない。

以上のことから中間構文の特性を簡単にまとめると、この構文は表層主語の特性を述べる構文であり、動作主は潜在的に存在する。また、副詞的修飾要素を伴い、それらは主語の特性を述べるもの、すなわち主語指向であるものに限るといえる。

### 3. 総称文の特性

ここでは、中間構文と同じといわれる総称文についてその特性を簡単に考察していくことにする。総称文とは、ある類(genus, class)についての特性を述べる文である。ある類を表す場合、名詞に不定冠詞、定冠詞、ゼロ冠詞<sup>7</sup>を付す形で表される。

#### 3.1 総称主語

総称文の主語である総称主語は、不定冠詞、定冠詞、およびゼロ冠詞を伴った形で現れる。これら3種の名詞句は、総称的に用いることができるが統語的にも意味的にも異なった様相を示す。

まず、述部によって容認性が変わることがある。

(30) a. The madrigal is polyphonic.

b. A madrigal is polyphonic.

c. Madrigals are polyphonic.

(31) a. The madrigal is popular.

b. \*A madrigal is popular.

c. Madrigals are popular.

(30)ではすべて容認されるのに対し、(31)では不定冠詞のみ容認されない。このことから、不定冠詞は類やクラス全体について叙述するような述語とは共起しないということがいえる。つまり、不定冠詞の場合は「一つ」という意味が消えずに残っていると思われる。そのため、類全体に及ぶような述語とは共起しないのである。総称的な読みをする場合でも、あくまでも一つのものですべてを代表とするという形になるのである。

これに対し、定冠詞およびゼロ冠詞はクラス全体について言及する述語と共起することから、類やクラスを表すことができるといえる。もっというなら、定冠詞の方は単数扱いで代名詞で指す場合も it であることからクラス全体を一つの塊として言い表し、ゼロ冠詞の方は複数形であり、複数形の代名詞で受けることから当該クラスの成員を表しているといえる。

#### 3.2 意味的特性

総称文は、前述の通り、主語である類、クラスについて、その特性を述べる文である。したがって、特性を述べるという点からみても中間構文同様できごとのというよりは、むしろ状態を表しているといえる。つまり、個々の動詞ができごとを表していても、構文としては状態を

意味しているのである。

また、ある類を総称しているということは、会話の参加者がそれをすでに知っているということである。つまり、情報構造上からいうと、旧情報ということになる。Hallidayも述べているように、旧情報が占める最も一般的な位置が、文頭の主語の位置である。

さらに、総称文に限らず何かについて述べる場合の最も無標の形というとはやはり能動態である。能動態である限り主語が動作主になるのは当然のことである。もちろん、能動態の主語であるからといって、それらがすべて動作主であるといっているわけではない。総称文の場合も、先に述べたとおり、文全体の意味機能は特性を表し状態的(stative)である。したがって、主語は動作主であっても特性を述べられている名詞句にすぎないのである。

#### 4. 中間構文における総称性

すでに述べたように、Keyser and RoeperやCondavdiは中間構文はある意味で総称文であると考えている。そこで、本章では総称文と比較しながら、中間構文の総称性についてみることにしよう。

中間構文と総称文が同じであるという理由の一つとして、時制が挙げられている。ただ、彼らは中間構文は現在時制でなくてはならないと主張しており、また、総称文も現在時制でなくてはならないと考えている。次の例をみてみよう。

- (32) a. The book reads easily.  
b. ? The book is reading easily.  
c. ? The book read easily.
- (33) a. A cow eats hay.  
b. A cow is eating hay.  
c. A cow ate hay.

たしかに、(32)の中間構文でも現在進行時制や過去時制では容認度が低いし、(33 a)は総称文として容認されるが、(33 b)、(33 c)には総称的な解釈はなく、一頭の牛についての記述でしかない。したがって、中間構文や総称文が主語の特性を表すということを考慮すると、現在時制が最も一般的であるということはいうまでもない。

しかし、現在時制でなくても、副詞的要素や文脈によって意味の整合性が認められる場合は、現在時制や過去時制などでも容認される場合がある。

- (34) The book is selling like hotcakes.



- (35) The orange peeled easily.
- (36) a. The beaver is building dams at this time of year.  
b. The beaver built dams in prehistoric times.
- (37) a. A beaver is building dams at this time of year.  
b. A beaver built dams in prehistoric times.<sup>8</sup>
- (38) a. Beavers are building dams at this time of year.  
b. Beavers are built dams in prehistoric times.

(34), (36 a), (37 a), (38 a)ではそれぞれ、繰り返し起こることによってそれが一つの特性として受けとめられるわけである。(35), (36 b), (37 b), (38 b)では過去の時点での特性を述べていると解釈できる。したがって、副詞的要素によって総称文および中間構文の意味特性と整合すれば、それぞれ中間構文、総称文として成り立つと思われる。時制という点では、中間構文は総称文と同じ分布を示しているといえる。

さて、中間構文は総称文と同様に主語の特性を述べるものである。中間構文と異なるのは、主語が類を表すかどうかという点である。中間構文の主語が類を表しているのであれば、総称性をもつ、つまり総称文と解釈できることになる。そこで、主語<sup>9</sup>について考察することにするが、その前に冠詞の無標の読みについてみることにしよう。中間構文も総称文も主語の特性について叙述するということから、主語は新たに導入されたものというよりは、会話の参加者がすでに知っているものといえる。このことから、ここで関係のあるのは定冠詞とゼロ冠詞といえる。もちろん不定冠詞も総称的な読みをもつが、前章で述べたように、不定冠詞の基本的読みは「一つ」である。あくまでも一つですべてを代表するということである。したがって、ここでは定冠詞とゼロ冠詞についてのみ考察していくことにする。

まず、定冠詞は、話し手や会話の参加者にとって既知のものを指すということが最も一般的な読みといえるであろう。

- (39) There is a glass and some water. Then I pour the water in the glass.

定冠詞の無標(unmarked)の読みは前出のものを指すということであるということは、総称的読みは無標ではなく有標(marked)ということになる。つまり、総称的読みをする場合は既知のものを指すという読みができない場合に優先されるのである。

ゼロ冠詞の場合は、無標の読みは総称的な読みといえる。ただ、すべてのゼロ冠詞を伴う名詞句が普遍的に総称的であるのかというところではない。次の例のハリケーンの解釈については2通りある。

- (40) Hurricanes arise in this part of the Pacific.

第一の読みは、すべてのハリケーンについて太平洋のこの地域で起こるというものであり、第二の読みでは太平洋のこの地域で起こるという特性はすべてのハリケーンについていえることではないということである。後者の読みでは、主語は普遍的に(universally)というよりは存在論的(existentially)に解釈される。このように、ゼロ冠詞の場合2通りに曖昧となる。どちらの読みを優先するかは会話の参加者の一般的知識、常識によるとも思われる。いずれにしてもゼロ冠詞の場合は、総称的な読みを無標の読みとしてもつといえる。

では、中間構文ではどうであろうか。主語の定冠詞は定的なものであろうか、それとも総称的であろうか。

(41) The door opens easily.

ドアが開くというのはドアのもつ基本的な機能である。開いて当たり前である。そのことについてわざわざ容易さをいうというのはある一つのドアの特性と解釈するのが妥当である。つまり、ドアという類について総称的に述べているのではなく、特定のドアについての叙述であるといえる。定冠詞の無標の読みである既知項目という解釈がなされたのである。しかし、文脈によって、例えば缶と比べるとという文脈があれば、この主語は類を表しているといえ、総称的な読みの方が優先されたことになる。すなわち、総称的読みを優先する場合は文脈などの要因が必要であるということになる。次の中間構文をみてみよう。

(42) This car drives easily.

(42) の this は this kind of の意味ではない。ある特定の一つのものを指している表現である。This kind of という句が明示されているのであれば、総称的な意味をもつといえるが、この場合も(41)同様、無標の読みがそのまま生きている。つまり、総称的な解釈はなされないのである。

ゼロ冠詞付き名詞句を主語とする中間構文の場合は、総称的な解釈が当然なされる。

(43) Bureaucrats bribe easily.

上記の文は、(40)の場合と異なり、限定されるような副詞句はついていない。したがって、曖昧な読みはなく官僚について総称的にその特性を叙述しているということになる。先に述べたとおり、中間構文に共起する副詞句は容易さや様態などを表すものが多く、曖昧さを生じるようなことはあまりない。したがって、ゼロ冠詞の場合のみ中間構文は総称文と同じであるといえる。

#### 4. 結 論

中間構文についてはいろいろと問題提起がなされてきているが、やはり、統語上の問題ばかりではなく意味特性および情報構造、語用論的な面からも考慮することの必要性がある。中間構文が総称文と同じであるという説があったが、主語の特性を述べるという機能をもつということ、状態的であるということ、および時制においては同じであるといえる。しかし、総称性ということについては全く同等であるとはいえない。中間構文において定冠詞を伴う名詞句の場合、定冠詞の無標の読み、すなわち既知項目を表すという読みが優先する。つまり、総称性はなく、単にある名詞句の特性について淡々と述べているにすぎない。ただし、文脈によって総称的な読みが可能な場合はもちろんある。一方、主語の名詞句がゼロ冠詞を伴う場合は、総称的解釈がなされるといえる。いずれにせよ、中間構文の主語に関しては、定冠詞およびゼロ冠詞の無標の読みが優先されるといえる。

#### 注

- <sup>1</sup> 中間構文に用いられる動詞の派生に関しては、自動詞説と他動詞説とがある。
- <sup>2</sup> 自発性といっても、何らかの原因、たとえば風が吹いたためというきっかけはある。
- <sup>3</sup> Stroik は統語的な説明を呈している。
- <sup>4</sup> Fagan(1992)は、sell と buy のこのような違いを責任(responsibility)という概念を用いて説明している。
- <sup>5</sup> もちろん、次のように人間が表層主語として生じる中間構文もある。
  - (i) She photographs well.
  - (ii) Bureaucrats bribe easily.
- <sup>6</sup> 強調構文のような構造は特殊であり例外である。
- <sup>7</sup> Declerck は名詞の複数形をゼロ冠詞付きの名詞句と呼んでいる。本稿でもこの用語を用いる。他にも、定冠詞プラス複数形の名詞もあるが本稿では触れない。
- <sup>8</sup> この文の容認性については、意見が分かれる。Chesterman は容認可能であるとするが、Perlmutter は容認不可能とする。
- <sup>9</sup> Fagan(1992)は、中間構文の潜在的動作主は「一般の人々」(people in general)であると主張している。つまり、動作主の方が表層に現れている主語より総称的であるという。本稿では、中間構文の潜在的動作主は単に「誰でもかまわない、誰がやっても～という結果がでる」という解釈にとどめておき、この点については言及しない。

#### 参考文献

- Burton-Roberts, Noel. 1976, "On the generic indefinite article", *Language* 52, pp. 427-48.  
———. 1977, "Generic sentences and analyticity", *Studies in Language* 1: 2, pp. 155-96.  
Chesterman, Andrew. 1991, *On Definiteness*, Cambridge University Press.

- Condoravdi, Cleo. 1989, "The middle: where semantics and morphology meet", *MIT Working Papers in Linguistics* 11, pp. 16–30.
- Dahl, Osten. 1975, "On generics", *Formal Semantics of Natural Language*, ed. by E. Keenan, Cambridge University Press, pp. 99–111.
- Declerck, R. 1991, *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha.
- Fagan, Sarah. 1988, "The English middle", *Linguistic Inquiry* 19, pp. 181–203.
- . 1992, *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge Univ. Press.
- Fellbaum, Christine. 1986, "On the middle construction in English", *Indiana University Linguistics Club*.
- 福田久美子. 1993, 「英語における中間構文再考」, 『川村学園女子大学研究紀要』 4: 1, pp. 85–98.
- Halliday, M. A. K. 1985, *An Introduction to Functional Grammar*, Arnold.
- Keyser, S. and T. Roeper. 1984, "On the middle and ergative constructions in English", *Linguistic Inquiry* 23, pp. 127–37.
- 小山久美子. 1996, 「総称文の解釈に関する一考察」, 『川村英文学会』, 創刊号.
- Massam, Diane. 1992, "Null objects and non-thematic subjects", *J. Linguistics* 28, pp. 115–37.
- O'Grady, W. D.. 1980, "The derived intransitive construction in English", *Lingua* 52, pp. 57–72.
- Perlmutter, D. M.. 1970, "On the Article in English", *Progress in Linguistics*, eds. by M. Bierwisch and K. E. Heidolph, Mouton, pp. 233–48.
- Stroik, T. 1992, "The middles and movement", *Linguistic Inquiry* 23, pp. 127–37.
- 安井 泉. 1992, 「能格動詞と中間動詞」, 『言語』 21, 大修館, pp. 32–5.
- 安井 稔. 1995, 『納得のゆく英文解釈』, 開拓社.